九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[068]英語英文学論叢表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/1931497

出版情報：英語英文学論叢. 68, 2018-03-12. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

小谷先生のご退職に寄せて

高 橋　　勤

かつて福岡の学会に招聘された作家の宮内勝典が、歓迎会で同席した小谷さんを評して「仏さまのようなひと」だと語ったことがある。外見からすると「仏さま」というより「地蔵さま」のほうがより的確だろうが、わたくしはつい最近まで小谷さんの正確な年齢を知らずにいた。

「地蔵さま」とは失礼な形容であったかもしれないが、小谷さんはわたくしにとって「とてもありがたい」存在であったことは事実だ。ある時は悩み事に耳を傾けてもらい、またある時は将来の方向性を、さらにまたある時は無言の叱責でわたくしの行いを正してくれたからである。たとえば「本が書けない」と言えば「じっくり人に評価されるものを書いたらいい」と諭され、「夜眠れない」と言うと「起きていたらいい」と、また「馬齢をかさねている」とぼやけば「馬鈴薯は私の好物」と、時にはダジャレを交えながら接してくれたのである。

そんな小谷さんと数年前から大学院のセミナーを合同で担当することが実現した。「調査研究方法論」と称してアメリカ文化・文学にかんするゼミをもち、とくに80年代以降の批評論を学生たちと読み進めたが、この経験はわれわれにとってきわめて新鮮な体験であった。というのも最近の批評論を繙きレベルの高い議論にふれたことで、アメリカの文化・文学への視座が大きく揺さぶられたからである。それはまさに目からウロコの連続であった。

ここで小谷さんの経歴について簡単に触れておこう。小谷さんは学部、大学院とも九州大学で、最初に奉職された徳島大学での６年間をのぞくと、まさに40年以上九大で過ごされたことになる。御専門はウィリアム・フォークナーおよび合衆国南部の文化史研究で、その対象もフォークナーからアレン・テイト、ロバート・ペン・ウォレンからウィルバー・キャッシュへと多岐に亘る。そうした旺盛な知的好奇心が著書３点（共編著）、30点をこえる論文（『英語青年』等）、そして7件の科研プロジェクト（すべて研究代表）に結実している。教育活動については

英語の授業に加えて比較社会文化学府、人文科学府における大学院教育に携わられたほか、山口大学、熊本大学でアメリカ文学に関する集中講義を担当された。また日本英文学会理事、日本アメリカ文学会の代議員、編集委員、さらに九州アメリカ文学会の会長等、学会の要職を歴任されている。着実な仕事ぶり、そして温厚で協調的な人柄については周知のとおりであり、改めて記す必要はないだろう。

小谷さんは九大退官後も他大学でもうしばらく教鞭をとられるということだが、小谷さんには多くのひとが知らないもうひとつの顔がある。地蔵さまの顔ではない。小説書きの顔である。昨年九大文学部時代の同人誌『砂時計』を復刊し、それに「季節の外」という短篇を載せられたが、それが西日本新聞の書評欄（2017年11月29日付）に取り上げられたのである。顔写真入りである。書評者茶園梨加氏の文章の一部をここに引用してみよう。

> 小谷耕二さん「季節の外」（「砂時計」復刊第一号、福岡市）は昭和40年代、宮崎の海岸近くの病院が舞台である。主人公は肋膜炎で入院した中学生の少年・麓。50歳位の松永さんとの交流が中心となっている。ふたりは雑木林を散歩し、兎小屋に立ち寄ることが日課となっている。（中略）世界と触れようとしない自分を「季節の外にいるみたい」だと捉えていた麓だったが、大人たちの持つ暗闇を前にし、兎小屋へと向かったのだった。兎を解放することで松永さんや須藤さん、そして自分を解き放とうとしたのではないか。獣道を分け入って行くことと、大人たちの暗闇を感じとろうとする行為がうまく重なっているようにも読んだ。

物語の構成と展開の巧みさからして、わたくしはてっきりこれまで書きためられたものを再構成されたのだろうと考えていたが、昨夏一気に書き上げた書き下ろしであるそうだ。もしかして、隠された才能があるのだろうか（!!?）。

九大を退官しこれから自分の時間をより多く手にされたいま、小谷さんは自分のなかの兎をどのように解放されるのか。地蔵さまのようにニコニコと微笑み人々の悩みに耳を傾けながら、その一方で、複雑化する現実の襞を鋭利なメスで切りひらき、ひっそりと物語を紡いでゆかれるのかもしれない。